



蹴球部記念試合

山形中学共同会誌 蹴球部

昭和七年度 昭和七年十二月発行

五忠 四釜市郎
五忠 松岡 正

幾多の困難に遭遇し乍らも、過去数年間堅実な歩みを続けてきた我が蹴球部が、今度共同会誌に部報をのせる事ができるようになった事を我々一同心から喜びたい。この事だけでも輝かしき希望に充ちた将来への意義ある第一歩である事を思ふ。此の一步を印せんがために、吾等以上に苦悩の道を歩み、努力せられた諸先輩に心から感謝し、又敬意を表すものである。憂うつな冬が去って一雨毎に春は甦つて来た。シットリと水気を含んだ土に淡い緑の若葉が萌えて、我等若きものゝ心にも似た新鮮な若々しい気分が充ちて来た。新学期忽々我等は練習を開始した。然しそれは淋しい練習でなかつたらうか。舟山、佐藤、貝和、後藤、横倉の諸兄を送って校庭に残るものは僅かであった。我々の心が淋しさで一杯であったとき、元気ある下級生が入部してきた。そして毎日々々愉快な練習を続けた。我々は皆元気を回復した。そして我々一同は先輩諸氏から「我等の汚名を洗い落としてくれ。そして羽陽の覇者となってくれ」と云われた言葉に力付けられてグラウンドを蹴り廻った。

六月十三日我が部は本年度最初の練習試合を山師と行ふ。然し我が部は体力の相異如何ともする能はず、前後半に各々一点づつ得点され惜敗す。しかし我が技術の発達は山師を驚かす。間もなく山工と練習試合を行ふ。我が部断然強く三対零にて軽く勝つ。

七月二十五日より休暇を利用して一週間炎熱焼くが如き校庭に於いて猛練習を行ふ。

九月二十五日。山形県体育連盟主催県下中等学校蹴球大会に出場す。我が部は元気に満ち、必勝を誓つて奮戦したが吾に利有らず優勝校米工に準決勝に於いて一對零にて惜敗した。我等は破れた。しかし最後の目的は山高の大会にある。昨年はあの真紅の優勝旗は山師の手に帰した事を想い、吾々は涙を流し復讐せんものと猛練習を持続した。九月下旬山形に中等学校蹴球連盟生まれる。そして十月上旬連盟主催の市内中等学校蹴球リーグ戦が本校グラウンドに於いて開催され、結局我が部は第一位となる。

十月十七日。全東北蹴球大会を山高グラウンドに於いて行ふ。午前九時半選手入場と共に戦いは始められた。吾が部は準決勝に於いて常敵山師と対戦す。吾等は復讐の意気ものすごかつたが、屢々の好機を逸して復讐の意ならず、再び一對零にて敗れた。噫！吾が腕の拙きためか、或いは天の戯れか、吾等は只何と申し訳して良いか分らない。蹴球部の諸君よ、復讐を頼むぞ！山師、鶴中を敗れ。そしてあの優勝旗を君等の手で取ってくれ。頼む。

去るに臨みて

今去るに臨みて静かに過去を思ふとき、其処には幾多の先輩の血と涙によって彩られた歴史、戦跡がある。これに対して僕等は新学期始めに吾が部の為め大いに為す所あらんと誓つたが、今尽力して下された諸先生の恩に報ゆるなく、吾等の責任をも全うせず、黙々として去る止むなきに到つた事は甚だ残念だ。しかしてそれ等は皆我等の努力の拙きに思

ふ。居残る諸君よ、練習はつらい。しかし優勝の時の喜びを思ひ、常に過去の敗戦の悲惨は記憶せよ。吾が部は熱、意気、忍耐の三つをモットーとして進むのだ。一同自重を！君部の上に降りつづいた陰雨も降り止む時分が来る。吾等は諸兄と共に蒼空に燃ゆる太陽をふりあほがう。最後に河内山先生及び部員の健闘を祈る。

個人評

猶本年巢立たれる大國、荒井、工藤の諸君、ご苦労だった。有難度うと云ふより言葉は無い。只諸君の成功と健康を祈る。尚本年度のメンバー左の如し。

部内	藤井村橋國澤間釜井	國岡
坂大工長	高高大西本四荒	大松
W I C I W	H H F F K	
I L F R R	L C R L R G	(主)盆)

末筆にて失礼ながら今は遠く南の国に去りし菅生氏の努力に感謝し、合わせて貴兄の成果と健康をお祈り致します。

昭和八年度 昭和八年十二月発行

我が蹴球部は先輩諸氏のご奮闘により輝かしくも共同会の一部として、この名譽ある山形中学に存在するやうになった。現在の蹴球部は漸く人々に認められるやうになったとしても決して立派なるものと自慢は出来ぬ。むしろ生死の境をさまよつておるのだ。何が原因か？部員の欠乏、練習の不統制に他ならない。唯々時の解決を待つのみである。

市内リーグ戦の記

憶へば昨年畢生の奮闘もその甲斐なく武運拙く山師に惜敗してより一年間なりと雖も復讐の念を胸に秘め山形市内リーグ戦に出場す。九月十五日第一回戦山師と対す。吾等一同此処ぞと断然たる覚悟を以つて駒を進む。されど敵強豪山師は老巧なるチームにして我等若輩の齒のたつべき理由にあらず、各選手の悪戦苦闘も遂に力尽き惨敗の憂き目を見る。昨年来の期待全く水泡に帰す。練習不足の結果なるべし。

第二回戦九月十七日山工と対戦す。吾等必ず凱旋を挙げんと奮励したれど敗退のやむなきに至つた。然れども吾等何んとして落胆すべきか。次の県体育連盟に於いて必ず覇を握らむものと決起復讐せんと誓へり。

山形県体育連盟蹴球大会出場の記事

時に主将高村病に殞る。吾等如何にしてこの戦ひに出づべきかと迷つた。吾等は切に高村の出場を祈つた。彼なくして何として戦得よつぞ！遂に病身を省みず吾等が部の為決然として起つてくれた。斯くして居る間に時期は迫つてゐた。猛練習などは出来よう筈なし愈々戦いの日、思ひ深き昭和八年九月二十九日出場校は我校を混せて七校、第一回戦は山形中学対鶴岡工業。多数の校友諸君の応援を受け断固たる決意を持って進む。

前半 味方の選手勢強き物あり、屢敵ゴールに肉迫す。されど好機度々逸す。二十五分頃我がゴールキーパー傷つき右手自由ならず一点を敵に許す。

後半 前半の一点を挽回せんと一層悪戦苦闘。然し吾れの武運尽きしか、先にはゴールキーパー傷つき、高橋、水戸と相續きて殞れ、味方旗色益々悪し、我等は残者を以つて倒れて後己の精神を發揮追撃肉迫数合、噫天の悪戯か業の不振が為か遂に戦い我に幸いせず六対〇で敗退しぬ！何んの面目ありてか諸校友及び先生に見えん。吾等は罪を謝しお詫びす。唯後輩諸君よ！今日を忘れるな！練習を統一せよ！必ず復讐せよ！

尚当日の出場選手左の如し。

部 澤 藤 山 村 山 橋 戸 間 澤 内
坂 沼 齋 横 高 船 高 水 本 西 大
W I F I W H H F F K
L L C R R L C R L R G
市内リーグ戦の出場選手左の如し。

部 澤 藤 井 村 山 橋 部 間 澤 内
坂 沼 齋 永 高 船 高 阿 本 西 大
W I F I W H H F F K
L L C R R L C R L R G

合宿の記

夏たけなはなる七月下旬、蹴球部員一同は千歳公園の西、武田某に宿す、一日日未だ昇らず気静かなる朝ガバと床を起き出で早暁の公園に猛練習す、朝の神々しい空気は若人の身をつつみ、若人の叫びは境内の静かさを破る、時に混じる鈴の音、流風静香を送り爽快云わん方なし、かくの如き時我等はある靈感にふれ、偉大なる力を得て、血わき肉おどり脇目もふらず体を空に躍らす、而して後汗をぬぐへば日は白雲をつき、濃い碧の空、近々と見え、若人の天をつく、然し時たつにつれ目はくらみ、足は曲がり腹の虫が鳴く、お！何処からとなく朝飯の臭ひす、しらすしらすのうちには足は西に向く。殊にあの市内リーグ戦に於いて、嘗て我等の配下であった工業にすら負けたではないか、又あの忘れんとしても忘れ得ぬ体育連盟に於いて鶴工に六対零で破れたではないか、その時我等は先輩諸子に涙を流し必勝の二字を誓ったことは脳裏に深く刻まれておる筈だ、我等は男子だ、殊に蹴球マンである、誓ったことは必ず成さう！然し過ぎしことを云ふはやめよう、唯来年に誓はふではないか、必ず成さん！と。高橋良治、船山、坂部孝夫)

個人短評

二年 諸君達は大変上達して来た。来年は我が部の中堅だ、一生懸命練習したら当たる所敵無しだ、来年は大いに四年、五年を助けて我が部を発展される事を頼む！

菅野君、奥山君、君達は練習したら驚くほど上達するぞ！

高村君、高橋君、藤野君、千葉君、君達は実に有望だ。

高村君 君は大変上達した、実に我が部の花形だ。

高橋、藤野両君 君等は大変上手になった。

千葉君 君は顔を見せないね、うまくなる価値はある、練習し給へ。

三年 水戸君、阿部君 君等は我が部に重要な人物だ。

水戸君 君はめざましく上達したよ。

阿部君 君も上達したが、もっとしまったら、ものすごい選手になるぞ！以上二君よ、君等は我が部にとって実に重要だ、今後も五年を助けてくれ。

四年 西澤君、実に君は我が部の大黒柱だ、君達本間君と共に大いに練習し、下級生を教導してくれたら我が部は益々奮い立つ行くのだ、実に君等の奮闘によるのだ頼む！頼む！本間君 西澤君と共に本当に大黒柱だからしまつてくれ、君達のゴチは千人力だ、頼む！

沼澤君 今迄我が部のために尽くされたことを心から感謝する、此の後もどうか下級の生徒に教へてくれ、頼む！

坂部、船山、高橋三君等 君達は実に前の三君と共に我が部の頭だ、三年は胴で二年は手足で何れも欠くべからざるものだ、皆共同して来年を頼む！我等は君達の奮闘努力した結晶として来るべき試合に優勝する日を心から待つて居る、頼む！我が部の為に力を尽くしてくれ。

五年 高橋君、病気を無理して我々をゴチしてくれまして実に有難う御座いました、下級一同に代つて厚く御礼申し上げます、御恩は一忘れません、有難う御座いました。

横山君、齋藤君 毎日我々の為に指導下されまして有難う御座いました。
以上の諸兄等よ！受験準備に多忙の中を時間をさいて我々を御指導なされまして、お蔭で我々も非常に上達しました、何時かは此の御恩に対して恩を返さうと、我々は腕を鍛へております、諸兄等が卒業された後も我々の所に立派な人物となって我が部を訪れる日を待つております、先ほどの事を厚く厚く紙上で御礼申し上げます、諸兄等よ丈夫で！我が部で鍛へた双足で！此の社会に出て奮闘して下さい。

今思へは合宿の奮闘も無益に終りしといへども精神的には確かに得る所があった、来年もしっかりとやれ。我思ふに「清き心の益荒男が意気と力を取りもちて再び起たば何事か大なる勝利成らむらむら」と。

昭和九年度 昭和九年十二月発行

創立五十周年

ここに繰り広げられる蹴球部の歴史は、余りにも短く且光輝なきそれであることを悲しむ。

昭和三年 一部の有志によつて球は蹴られ始めたのであったが、整然たる形態をとるに至らない全くの揺籃時代であった。

昭和四五年 競技に対する認識も深まり、稍々向上進展の曙光を見るに至つたが、依然として幼稚さを免れなかつた。

昭和六七年 チームの組織も不完全ながら形を備ふるに至り、惨敗を喫しはしたが、県及び高校の大会に出場し得らるゝ所まで発展してきた。

昭和八年——共同会の一部として編入された。この公認は積年の念願であっただけに、実現の喜びは並ならぬものがあった。初代部長には河内山教諭が当てられた。

市内中等学校連盟が結成せられ毎年春秋二回工業・師範・吾校のリーグ戦が開かれることとなった。

昭和九年——運動場にプールを新設しコートを設定した為、不十分な練習場が多少緩和された。県体連の大会にて三等を克ち得た。これは山中恐る可しの印象を全県下に与えて痛快である。主将西澤茂以下部員二十有五、来るべき高校の大会に備へて精進怠りない。

以上の如く吾部には燦然たる伝統の光も絢爛たる栄誉の輝きもない。唯吾等のもつ誇りは若さのみである。盤根錯節を押し拓き、切り開き猛然と進む若者の姿こそ吾部の象徴である。僅少なる部費と、運動場の狭隘に喘ぎつつも苦闘を続けつつある吾等に、若者のみがかもつ意気と情熱が無かつたら何事が為し得られよう。

吾等のモットーは打倒山師であり、鶴中一蹴であるとは云へそれは更に大なる目的への足場に過ぎない。

駆て吾等は毎年八月甲子園に行はれる全日本中等学校蹴球大会に東北代表として駒を進めるであらう。昨日最上川の岸辺を洗った漣は今日は巖を噬む日本海の大怒涛となると同様、今不運を託った吾部に全国大会優勝の大旗を月山嵐に靡かす日がないと誰が断言し得ようか。(Y・K主記)

主将 西澤 茂

委員 高橋 良治

坂部 孝夫

昭和八年名誉ある山形中学校共同会に編入し得た吾蹴球部は、創立後の歴史未だ浅いとは雖も、代々の諸先輩の血の出る様な報部の赤誠と御尽力に依って、斯くまでも急展することが出来得たのである。

此処に越年の暗雲もそよ吹く南風に吹きやられて空はからりとはれて来た。東の方よりは赫赫たる太陽が美しくその姿を現はし、緑の村山平野を愛で始めた。その頃歡喜に満ちたわれ等若人は今將にほころび様としてゐる。若い芽と共にすすくとのび行くのであった。春！春！春が来たのである。

この喜びをよそに前年度のキャプテン高村氏を初め、齋藤、横山を送った我等は、一脈の淋しさを胸に抱いたが、幾多先輩の血と涙によって彩られた吾山中蹴球部の過去と、連年の汚名を雪辱するは勿論、本年こそ必ず積年の宿望たる全東北蹴球大会の優勝旗を我等が頭上に翻し、以って吾が蹴球部の意気を示さんものと誓ったのであった。

斯くて重任を双肩に荷負った吾等は多数の新入生を迎へ、雪溶け後間もないグラウンド上に、その半以上は野球部の為とられる場所に不自由しながら、早くも四月九日より練習を開始した。

不運なるわれ等、練習場にも頭を悩めねばならぬ吾等は、夏の炎熱焼くが如き下にも物ともせず、唯一途に先輩諸氏指導の下に練習を続けて来たのである。然し天は我等を認めず否練習未だ不足なる為、その宿望を遂げないで敗惨の血涙を見るのやむなきに至った。我々よ嘆くなかれ。君等には明日があるぞ。必ずや輝かしき時があるぞ。自重して我等不甲斐なき業を復讐されんことを。唯その時の来るを待つのみあとで。左に吾部本年度の血涙の跡を記さう。

本年度選手は左の通りである。

五年 西澤 茂 高橋 良治 坂部 孝夫
舟山 正利 本間 幸太郎 佐藤 鋼次

(大内吉五郎)

四年 水戸 第五 佐藤 文雄 瀧口 完一

阿部 虎治

三年 藤野 實夫 管野 三好 高橋 誠喜

高村雄七郎

補欠

三年 井上 正 海谷 正男

二年 渡邊・鈴井・武田・高橋・仲野・右井

尚県体育連盟出場選手は左記の通りである。

F W I F I W H H F K

R L L C R R L C R L G

茂利 夫 夫 雄 好 吾 治 次 郎 喜 一 郎 正

正 實 孝 文 三 第 良 鋼 太 誠 完 七

幸 雄

澤 山 野 部 藤 野 戸 橋 藤 間 橋 口 村 上

西 舟 藤 坂 佐 管 水 高 佐 本 高 瀧 高 井

將 欠

主 補 欠

四月九日 一回元気に練習開始した。

五月五日 午後二時より対山形高等学校練習試合。此の日七対零で敗れたけれどもその得た利益は大であった。

の得た利益は大であった。

五月三十一日 午後三時より対山形工業練習試合。五対一で我等快勝。コンディション絶好であった。

好であった。

八月二十日 本日より合宿練習開始。三十日迄十日間。

八月二十八日 午前九時より対山形師範練習試合。六対三にて惜敗す。

九月五日 本日より本校創立五十周年記念祭に於ける校内蹴球大会開催。A組第一回戦。

戦。

九月六日 同 A組第一回戦及第二回戦。
 九月七日 同 A組第二回戦及第三回戦。
 九月八日 同 B組準決勝戦及決勝戦。勤組優勝す。
 九月十日 同 A組準決勝戦及決勝戦。恭組優勝す。
 (備考) A組……二年より五年 B組……一年より二年
 九月二十八日 県下男子中等学校体育連盟主催蹴球大会に出場。
 第一回戦。対米沢工業。辛勝す。
 九月二十九日 同対山形師範戦。昨年の復讐ならず我等敗退す。
 十月三日 山形高等学校主催北日本蹴球大会に出場す。

合宿の記

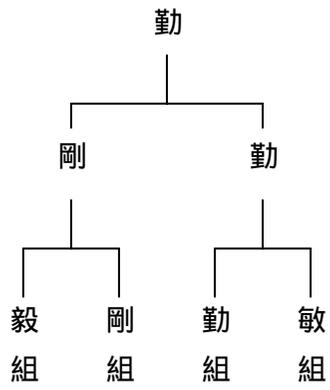
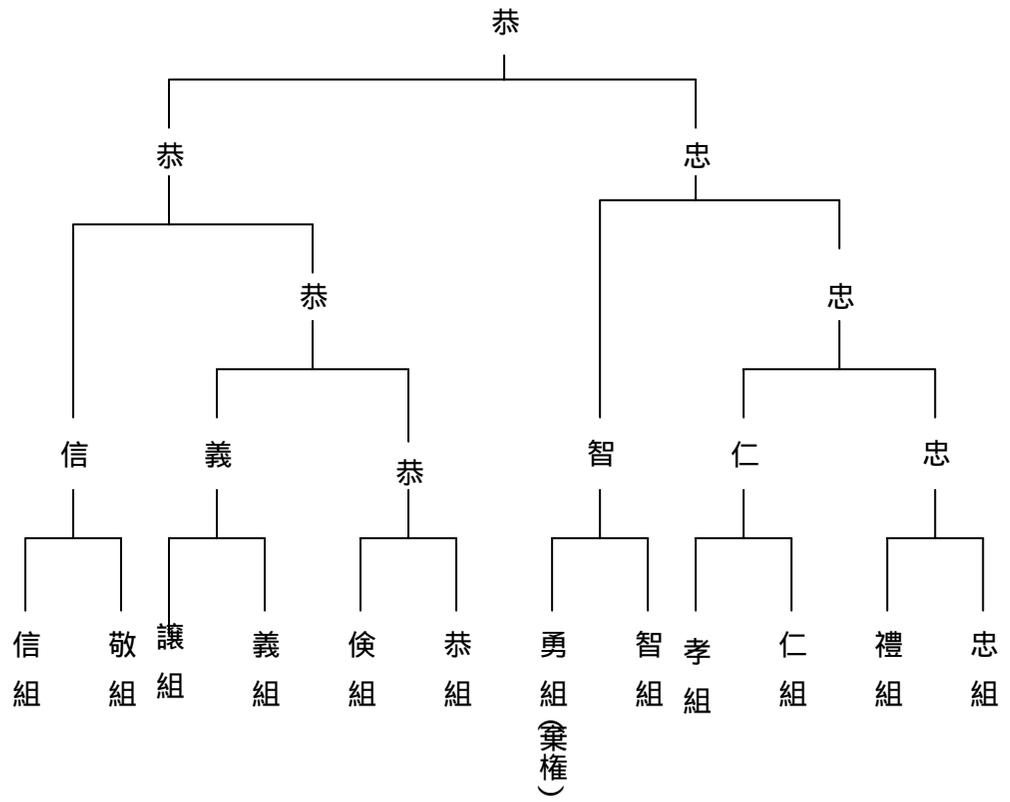
夏たけなはなる八月下旬、二十日より十日間蹴球部員十余名は来るべき体育連盟に優勝戦と、固い決心のもとに寺内に合宿を行った。朝は早くより豆腐屋の笛の音を聞きながら校庭に足を進め、約一時間半のウォーミングアップ。そろそろ腹の虫も泣き出す時再び家路につき、味噌汁の香りはすき腹の虫をグーグーうならせた。この事幾度か。又真夏の昼炎天下をも何のその、雨の日も風の日もやった。唯来るべき目的の為に。我等は「チヤーはいない。然し主将西澤の下に五年生諸君のご指導のもとに研究に研究に。その得る所大であった。又佐藤正壽氏先輩の外数人の方々がこられ一言の忠告を下されたことを謝す。(高橋記)

創立五十周年記念校内蹴球大会の記

創立五十周年記念事業として吾々もその中に加えられ、年来の望クラスマッチを行ふことが出来た。クラス多きが故十日の一日では為し得ず、九月五日より開始した。

九月五日 忠組 1(0) 0 1 0(0) 禮組
 全 孝組 0(0) 0 0 1 1 仁組
 全 恭組 1(1) 0 0 1 1 儉組 (翌日再戦)
 九月六日 恭組 1(0) 0 1 0(0) 儉組
 全 忠組 2(0) 1 2 0(1) 仁組
 全 義組 6(4) 0 2 0(0) 讓組
 全 恭組 1(0) 0 1 0(0) 義組
 九月七日 敬組 0(0) 1 0 0(1) 信組
 九月八日 剛組 0(0) 0 0 0(0) 毅組 (剛組抽籤勝)
 全 敏組 0(0) 1 0 1 2 勤組
 全 勤組 3(2) 0 1 0(0) 剛組 (B組決勝)
 九月十日 恭組 1(0) 0 1 0(0) 信組 (A組準決勝)
 全 忠組 1(1) 0 0 0(0) 智組 (全)
 全 忠組 0(0) 0 0 0(0) 恭組 (恭組抽籤勝 A組決勝)

A組戦跡



右の如く非常な盛会であった。十日には優勝クラスA組恭B組勤にそれぞれ賞品を授与した。斯くして今まで隠れたるスポーツ蹴球をして大いにその名を挙げしめ且その真相を知らしめたることは大いなる収穫であり、吾々の喜びとする所である。

県男子中等学校体育連盟出場の記事

吾等日頃の練習は何のためか。曰く例年の汚名を雪ぎ、此の大会に優勝者たらんこと

ある「その望は小さいけれども帰する所は一にして二にあらざ。唯優勝の二字のみ。

吾等は他の部のような遠征或いは全国大会に出場することは到底不可能である。故に吾

等は本大会を唯一の試合として、いかなる苛酷な練習にも耐えて来たのである。必ず勝たねばならぬ！此年こそはと復讐の念は火の如く胸中に燃え立った。時將に九月二十八日初秋の空はあくまでも高い。一千の校友諸君の熱ある応援のもとに断固たる決心を以って出場した。

第一回戦。米沢工業と対戦す。スコアは前半後半共に零対零実に接戦々々、味方のFBの活躍目ざましきものあり。遂に一点も敵に許さず。敵もさるもの味方のFWの鋭鋒をたくみにさげ、一点の得点もなかった。そのまま延長に入った。またまた白熱戦。肉弾相撃の物凄い戦いであつた。此れでも雌雄決せず遂に抽籤のやむなきに至つた。武運良かったのか我等は辛勝することが出来た。

第二回戦。山形師範と対戦した。

スコア 山 中00004山 師

前半。吾等の口頃の練習は見事に功を奏し常に敵を圧迫、殊にCFの好投により屢々敵ゴ―ル前に肉迫したが敵もさる者、その都度好期を逸した。残念ながら彼らは我らに一点も許さなかつた。後半。先の元気を續くれば必ず勝利を得てゐた嗚呼而し何たる運命の悪戯だらうか。吾等の大黒柱FB前日の戦いに足を病め、続いてCF連日の練習に無理し遂に戦い得ず、残者を以つて如何にして敵し得ようぞ。大刀は折れ鎧は破れて悪戦苦闘遂に四対零で敵に降つた。此处に遠来の宿望は全く失われ、先輩の志を継ぐ能はざりき。されど我等はベストを監した。唯体力の小なるを如何せん。我等は罪を謝す。後輩よ立て！今日の汚名を復讐せよ。我々は去るにあたり最後まで此の二字を叫んでやまぬ。

去るに臨みて

卒業！嗚呼我等5年生は最早諸弟等を残して此の思ひで多い母校を巣立たねばならないのか。斯く考える時我等の脳裏に浮かぶのはあの骨まで沁みる程冷たい北風も、温かく香よい南風に追ひやられ、白雪淡く消え去り、弱い日の光にかげろつさへもえる春の訪れを迎えへ、我等五年生は元氣溢れる諸弟君と胸を轟かせ足を撫でし、腕を撫でつゝ揃つてグラウンドに立つてより、一同スクラムをしっかりと組み、輝く勝利を全身に秘め、青春の風に吹かれ、もえ出る若芽と共に総ての誘惑を寸も顧みる事なくまじめな熱ある猛練習を續けて居る中アスファルトも溶ける炎暑が、我等若い血の高鳴る勇者の集ふ蹴球部室をノックした。精力溢れる健身に喜びを満たして戸を開けた。然し訪れた夏は期待した程でなかつた。否期待にはまったく反した皮肉な悲觀すべき恨むべきものだった。あの空一面に拡がった鉛色の雲は、毎日々々我等の道場を濡らし続けて、あい間あい間に見える青空はその雲の為かき消され、やがては我々の意気をも消されんとしたが、己を励ます熱意で防ぎ続け、合宿練習の日は来た。然し、その為か合宿の初日中はあまり統一しなかつたが、大切な最良の後日は皆元氣な顔で集まつてくれて大いに真心の籠つた練習を続け、雨中を猛烈な接戦を演じて、大敵山師と戦ふて深く印象を刻みつけて合宿練習を終つた。と時を同じうして第二学期は開始された時、当に初秋の風日に強さを増し、秋色日に濃く、空高く空気が澄み切つて、我等のゲームに最も適した季節と成つて居た。我等の胸は再び高鳴り脚は浮き立つ。

待ちに待った五十周年記念日中は我が部は大いにスポーツ山中の名を挙げると共に、部名を弥が上に挙げて、後研究に練習を重ねて県体育連盟主催の試合に参加して全力を尽くし、練習と研究により作り上げたフラインプレーを表示して、二回戦まで続いたが、惜しや山師に敗れた。然し此れには体力と練習に欠点が充分あったんだ。

諸弟諸君よ！自重してくれ。もっと部内を統一して、去りゆく我等が進んで来た行跡を研究し、悪い点を改善し、良い点はもっと良くしてくれ。

スポーツ精神を発揮して態度を正しく保ち、上級生の命令に快く応じて練習を積んでくれ。頼む来年こそはきつと死力を尽くし、正々堂々と戦って県の覇者と成って名声を挙げてくれ。我等はそれを切に望むのだ。祈るのだ。

若人の諸弟諸君。文武両道を極め、且又健康に気をつけて呉れ。さようなら。(佐藤生)

個人評

二年 此のクラスは部員も大勢で皆真面目家揃ひだ。此の元気で行けばいゝ。来年は中堅だ。四年・五年を助けて大いに活動して呉れ。上級生には絶対従順なれ。

渡邊君 君は一番見込みあるぞ。技も随分上達した。未だ未だ伸びるぞ。唯慢心は大なる禁物だ。あまりシャベラズに来年は働いてくれ。

鈴井君 体は小さいが技は素晴らしいぞ。その真面目さと元気でやってくれ。好漢自重。

武田君 君は二年で一番真面目だ。体、頭、技三つ揃って伸ばせ！高橋・仲野・石井の諸君、練習が第一、真実にやれ。

三年 此のクラスは猛者揃ひ、非常に力強い。今年是有難う。来年は四年小さい五年を助けて活躍してくれ。親しき中にも礼儀有「唯此れを忘れるな。若し忘れるときは部の不統制思ひやられるぞ！自重々々。また下級生を指導せよ。」

藤野君 君の技倆には感服の外なし、何も言ふことなし。唯来年は大いに自重して水戸君と共に部の統一を図ってくれ。水戸なき後は君一人だぞ！

菅野君 その体格、頭、誠に敬服するに値する。然し来年は四年だ。五年を助け下級生を指導せねばならぬ。君の使命は重く且大なり。技をモット研究的に！

高橋君 今年のキーパーなき我等を助けてくれたことに深く感謝す。技は実にすばらしい。来年の宜しく頼む。

高村君 選手なき我部に尽力して下さったことを謝す。技は充分だ。且慢心は厳禁だぞ。体力一つを大いに養ひ、来年は大いに活躍することを夢見てゐるぞ。

井上・海谷・奥山君の諸子 熱心に元気にやってくれ。奥山君よ。君のその頭脳で来年は早くしてくれ。春以来練習されなかつたことを残念思います。

四年 部員は少ないが練習は熱心が必要とす。専心されよ来年は我等なき後を継ぎ、本年度否歴史の汚名を雪がれよ。

水戸君 我等頼むは君一人なるぞ。部の統一は最も大切。一意専心下級生の指導を望む。今や蹴球部の運命は君の腕一つにかつてゐるぞ！頼む！我等なき後を。嗚呼我等

何をか云はん。君の活躍を待つのみ。

瀧口君 今年早々入部された君はめつきり上手になったねその朗らかな元気を以って芸に励まれよ。必ずや一技術者になるぞ。水戸君を助け部の統一を頼む。

佐藤君 君は合宿練習の出来なかつたことを非常に残念に思ひます。而し君の意気は万丈の意気だ。その元気で為さば来年の大業等は虫けらも同然だ。無理はせなくとも練習は眞実に適度にやってくれ。

阿部君 昨年は未来を宿望された君が、不慮の病を得はからずもわが我の為尽くして下さることが出来なかつたことを遺憾とするものであります。今や健やかになつた君であるから、来年は是非我等の後を継いでくれ給へ。

五年 我々は最早に尽くす時期を失つた。唯将来先輩として在校生を指導するのみである。過去を省みれば何の為す所もなかつた。然し我等はベストを尽くしたことは間違ひないと思ふ。最後に坂部君・佐藤君、受験準備の御多忙中の暇を割いて御指導下さつたことに對し感謝してやまないであります。(高橋記)

昭和十一年度 昭和十一年十二月発行

委員 高村 雄七郎

山は日に日に緑を増し野には種種の草花が思ふ俛に咲き乱れ風は日を追つて暖かみを増す頃、荒れ果てたグラウンドに立つてより、炎天乍ら練習したのも、冷やかな日光に追われとつとつ過去と言ふ二つの文字に納めねばならなくなつた。

さらば過去一ヶ年に垂んとする蹴球部を回顧して今年度の足跡を辿らう。其所には喜びと哀愁の情緒が二重奏となりて、色も濃く流れて居るものと見られる。

春の恵みが静かに訪れ、勇躍一番出で、新生活を続けんものと意気込むは独り禽獣草木に止まらず、若い吾等の蹴球部員も今年こそはと黄金時代の建設を目指して意気込みを先ず春の活躍のスタートを切つたのである。左にその戦跡を記して見よう。

四月二十九日 消えゆくグラウンドの雪を眺めながら練習した初の力だめに山師と対戦す。選手一同元氣なれどコンビの不備により敗れる。

五月二十日 対山高と練習試合を行ふ。五対一で敗れるけどこの日大いに得る所有り。

六月二十日 青葉の香り深き時切つておとされた市内中等学校蹴球リーグ戦に日頃練習せし腕を振るひし甲斐もなくあわれ敗残の騎士となりて屈服せねばならなかつた。騎士よ！立てそして復讐せよ、必ず来るべき戦いに於いて。左にその戦跡を記せむ。

六月二十三日 山中対山師、第一回戦一対一で引き分け。

六月二十四日 山中対山工、第一回戦一対一にて引き分け。

六月三十日 山師対山中、第二回戦二対〇で敗る。

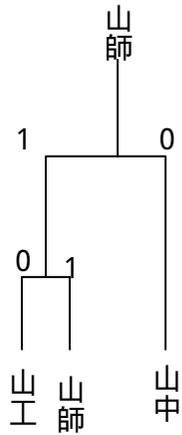
七月二日 山中対山工、第三回戦二対二で引き分け(眷リーグ)

七月二十三日 夏季休暇となり合宿練習を行ふ。左にその内容を記さう。

万物すべて安き眠りよりさめんとする朝、とく起き出でて外に出づればひやりと冷氣が

身にしむ。グラウンドに着く頃漸く太陽が東の空に出かゝるのだ。それから幾時はかりか、猛練習して終る頃身体は綿の如く疲れ宿泊所に帰るのもいやな位だ。それでも宿泊所には元気を出して皆は帰る。帰るも道理だ、吾等の空腹を満たしてくれる甘き汁御飯が待っているのである。朝食は丁度八時である。朝食後は体の休憩時間だ、あとはもう午後四時まで自由なのだ、そして四時からあたりに夕靄が立ちこめるまで練習をやって帰るのである。そして夕餉の膳に舌鼓を打ち合ふ頃は一日の疲れが急に出て又一日の楽しみが話題に上る時なのである。

九月二十六日 村山中等体育連盟大会なり。うれしい夏休みも終わりをつげた。我等蹴球部の合宿も夏休みの中に終わり、新学期の始まりと共に再び来るべき戦いに備へて猛練習を開いたのである。そしてこの晴れの大会に出場した。村山と云々と市内の三校だけなのだ、それで吾等は仇敵山師に向ふ。しかし何たる不運か、前半味方の不調に乗って敵は攻め来り十五分頃遂に一敗を許した。後半吾等調子滞くつきて巧みに攻むれども功ならず遂に再び山師の門に伏したのである。



十月五日 市内中等秋季リーグ戦なり。春のリーグ戦に又体育大会に涙をのんで山師の門に服した恨みを晴らさんとして出場せしにその功成らず再三山師の門に伏さなければならなかった。この戦いをどうして忘れ得ようぞ、後輩よ、吾等の意気地なきを許せ、そして来年は必ず必ず復讐を誓ってくれ、頼む。(熊澤記)

山高主催 近県中等学校蹴球大会出場の記事

吾等が練習の目的は唯々優勝せんが為なのである。吾等は寒風吹きさらす残雪のグラウンドに、万物焼くが如き真夏の日をもとませずグラウンドに立ちて、はづむ毬に親しみながら汗と戦ひ寒さ暑さと戦ひながらひたすら優勝の大旗を月山嵐になびかせんものと猛練習して来たのだ。嗚呼憶へば去年の秋一杯地に塗られた我が部、復讐だ仇をうってくれと頼まれた僕等だ、必ず今年こそはと互いに心を合わせて猛練習したのだ。

時は仲秋。青桐の葉も黄ばみて落葉する秋、切っておとされた山高主催近県中等学校蹴球大会に於いて去年の恨みを晴らさんとして出場した。

十七日午前十一時半、山中対山工の第一回戦の幕は切って落とされた。味方の重鎮二名の不出場に加はりて調子の不備は実に苦戦を免れなかった。然れども好く戦ひ前半七分頃敵の際に乗じてF、W、E、Lのシュートよろしく一点を勝ち得た。されど後半に於いて益々苦戦となり我がF、Bよくゴールを死守せしも甲斐なく、敵に一点を許し、延長戦にても雌雄決せず抽籤となる。神の助けか我等は抽籤で勝った。勝ったのだ。まだ我等の前途は暗闇ではなかった。

明くれば十八日、我等は昨日の敵を屈服せしめ今日の大旗を握らんとする最後の決勝戦

に向かふのだ。去年の恨みを晴らすのはこの時ぞ再びかゝる機会に絶対無いのだ。

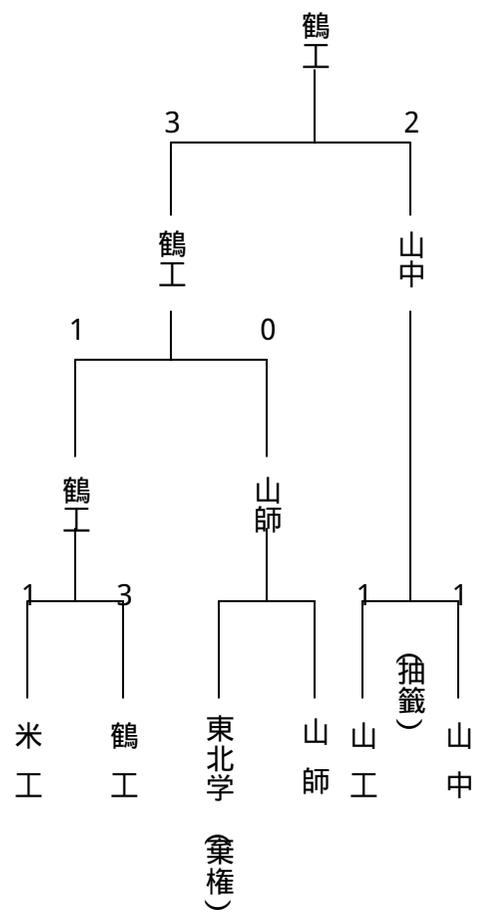
敵はと見れば去年の仇敵鶴工だ。去年の恨みをと時の来るのを待つ。午後二時山中先蹴により試合開始。前半、見事なパッシングにより三十秒にして一点を得、これより力を得て見事なパッシングによって敵に急迫し顔色ならしむ、敵もさるもの十分頃盛りかへして来りバックの奮戦空しく一点を許す。両軍意気実に旺盛、我がFWの活躍大いに目ざましく三十分頃敵のハンドにより一点を得て二対一で前半終る。後半味方は勝ちに乘じて常に攻め立て、ゆけど遂に延長戦となる。先の元気を続ければ必ず勝利を得て居たものを、嗚呼応援無くしてこの体力の差を如何せん。矢尽き刀折れ遂に我等は仇を報いずして再び敵に降るのやむ無きに至つたのである。然れども我等はベストを尽くし、充分山中の意気を發揮して戦つたのだ。左にそのメンバーと成績を記さう。

郎 郎 一 郎 弘 正 喜 祐 治 淳 力
 徹 七 忠 太 元 誠 敬 市

雄 源

橋 村 屋 戸 邊 澤 橋 保 田 村 藤
 高 高 蜂 寺 渡 熊 高 神 武 西 齋
 M I C I W B C B B B K
 R R L L R L F F
 F F F F H H H R L G

蹴球大会の跡)



末尾ながら今春以来非力なる吾等の為に多大の御助力をなし下されました菅生氏を始め諸先輩に厚く御礼申し上げます。(高村記)

昭和十二年度

結城蔵相来校記念号

昭和十三年三月発行

委員 蜂屋 忠一

懐かしい昨年度の先輩等も去つて一時は親を失い荒野に抛り出された子鳥の如き空漠たる気持ちで灰色の一冬を過ごした我々も春四月此所に萌え出づる若草と共に残雪消えゆ

くグラウンドの一角より新年度の声を上げたのであった。爾来我々は輝かしい我部伝統の保持と心身技共に充実せる理想的スポーツを目指して出来る限り精進し来た積りである。然るに尚我々の力及ばず何ら我部史に目覚ましい足跡を印せずして終わった事は遺憾な次第である。

第一学期はリーグ戦もなく試合は一回のみ。

五月廿三日(日)対山高戦。此の日本年度初試合に皆張り切ってやったが六対零にて敗る。併し試合後山高選手より懇切なる指導を受け大いに得る所があった。指導事項左の如し(後輩之を参考とせられたし)

- 一、概してボールに集まり易い
- 一、出足が遅い
- 一、キックの基本
- 一、走る練習をよくやる事
- 一、試合中一時サボル時間を見出して、短時間にガッチリ疲労回復を図ること(之は一番むずかしい)
- 一、サイドハーフの活躍の重大性
- 一、フォーアワードはW字形でゴールを囲むように半円を作って攻むる事
- 一、横パスより縦パスを用ふる事。等である。

第一学期考査終了後直ちに夏季合宿を行ふ。次に合宿記を記さう。

頃しも北支事変勃発直後の盛夏の候、我々は彼の地に活動しをられる、尊き皇軍将士に劣らぬ意気を以て三伏の酷暑をも物ともせず、猛烈な練習を開始したのであった。

午前四時半、目覚まし時計の鈴に夢破られ皆一斉に飛び起き早速支度を整へて山高グラウンドへ向ふ。(合宿所は山高に近い小白川町である)

グラウンドには朝露がしつとりと置いてあり、我等は清新なる朝の気を思ふ存分吸ひ込んで練習を始める。間もなく輝かしい夏の太陽が東の空に昇るや我々は満身日光浴び、若人の肢体は躍如として大地に躍る。かくて六時半(後には七時)で練習終わり各員健康色に満ちて合宿所に引き上げると其所には我等待望(?)の朝食が用意されてある。運動後の食事 殊に先生も交へて皆一緒に食ふ味は又格別である。朝食後午後三時半まで自由。(但し初の三 四日は学校へ行く)午後の部は三時半 六時半。一日中で二時間半の猛練習を二回なのだからその疲労は甚大だった。故に我々は暇さへあれば眠る事に努めた。夜は全く文字通り全身綿の如く疲れ、その上蚊とぶとに悩まされ、九時頃就寝した。

又あの合宿所の井戸水の冷たさも忘れ難き印象の「一」だった。疲れきった我々の渴きを癒してくれたあの冷水こそ我々の全身に脈々たる生気と限りなき慰藉を与えて呉れたものだったから。左に合宿中の日記を略記しやう。

七・一九(月)驟雨。本日より合宿開始。有難い事には部長先生も参加して下さいなうた。

合宿者氏名 五年 武田、蜂屋、西村、齋藤、鈴井、神保

四年 星川

三年 岸

以上八名(他の者は都合上自宅より通って練習す)

七・二〇(火)曇り時々晴。主にチームワークを練習す。

七・二一(水)晴後曇。午後山工と練習試合(↑ 0にて勝つ)後半我等ガンバリズムを発揮して接戦遂に最後の一分小林のゴール前パスを鈴井見事にシュートしてゴールを割る。先輩熊澤氏来り指導して下さい。

七・二二(木)雨。午後中止雨天の為中止。理論の研究。

七・二三(金)曇。今日は今迄と型を変へて練習し、得る所多し。

(↑ドリブルシュート、スゴール前のシュート)

七・二四(土)晴。午後富樫先生が練習中グラウンドに来られ、大いに士気上がる。

七・二五(日)快晴。午後山工と対戦。(↑ 3にて敗る)前半我軍武運拙く一点を先取さる。(↓ 1)後半夏陽炎熱の下に我軍苦戦苦闘漸くC.F.敵のR.F.B.を抜きシュートして一点を挙げるも天運至らず遂に敵に一点を許す。(↑ 2)試合後先輩高橋(鉄)氏の指導に猛練習をやり、宿舎へ歸りて痛烈に我々の反省を求められる。

七・二六(月)晴。今日は昨日の口惜しさを胸に秘め全員疲れたれど勇を鼓舞して猛練習す。

七・二七(火)晴。先輩水戸氏のコーチを受く。水戸氏曰く「貴様等の合宿練習を見て精神力の弱いのは特に目についた。精神力は或程度まで技を補ひ得るし、亦技の上達の第一前提でもある」と。本日にて意義のある合宿を終る。

以上を回顧して痛感することは我等の無力のみ。後輩よ我等を赦せ、結局は撓まざる練習なのだ。統整のある真面目な練習が最後の勝利を把握するのだ。後輩諸君！準備運動からラヂオ体操、ランニングの果てに至る迄立派な練習なのだ。寧ろ斯くの如き練習を真剣にやる事こそ大切なのだ。来年こそ大いに頑張つて本年度の雪辱をして呉れ。切に希む！(C.H.生記)

県下体育連盟競技会出場の記

空は飽くまで高く晴れ渡つた今日、此の日、今や我々の技倆を發揮すべき日は来たのだ。連年の苦闘苦敗、この雪辱を晴らすべき絶好の時機が来たのだ。幾多先輩の仇を果たすのだ。唯それを思ふとき我々の肉体は踊り而してあの血の出る練習にも打ち勝つてくることが出来たのだ。願へは去年の山高主催近県中等学校蹴球大会に於いて我が山中蹴球部の輝かしい優勝の夢は、無残にも強敵鶴上によって持ち去られたのだった。あれより辛苦早や一年、多数の選手を先輩として送り出した我々は、雄々しくも血と熱を以て振り起つたのだ。山中の為、我が蹴球部の為、戦ふべき今日が来た。そして1回戦は山工とだ、これは我々としてもいやな組合せだが敵にとつても不足は無し敢然として起つた。強敵山工は技倆体格ともにすぐれ真に山工の全盛と自認し、山商のコーチを呼んだりして我におとらず猛練習だった。全国大会東北予選にも出場したチームだ。敵にとつては勿論不足はない。この

試合良く善戦に善戦敵もさるもの美しいチームワークで進む。我等遂にバック陣のミスにて惜しくも二点前半に許した。我等多くのチャンスを逃がす。後半作戦の宜しきを得たのに乗じ彼等のコンビネーションの乱れにつけ込んでチャンス多々あるも、得点に至らず、遂に我等は仇敵鶴工と戦わずして退かねばならなくなった。唯涙のみ。津田先生及び緒先輩並びに熱烈なる応援に謝す。ここに於いて我等五年は来年の奮闘を願ふのみだ。四年以下の諸士よ！頑張れ！(KN生)

左に本大会出場のメンバーを示す。

邊 井谷(力) 邦 藤林 田村 川尾 保 藤 田

藤藤 岸

渡 鈴 蜂 齋 齋 佐 小 武 西 星 長 神 佐 永

W I F I W B B B B K (補)()()

L L C R R H H H F F G

L C R L R

去るに臨みて

今去るに望みて静かに思ふ時、過去の一年間は走馬燈の如く、楽しかった合宿、そして又幾度か涙にむせんだ練習、吾等の戦場だったグラウンドに、なんとさりゆく我等にとつて、さびしい感じ起こさせる事よ、我々は春まだ浅き頃、体育連盟大会を目指して、本校グラウンドに、或いは山工グラウンドに少人数ながらも一致団結してやった。だが然し戦運我等に利あらずして、体育連盟大会に敗れ去った。而も隣校の山工に、去りゆく吾等にとつて、これ以上くやしい事はないであります。

さらば居残る諸君よ、主将を中心として一致団結して、元気で練習して呉れ！而して山高大会、体育連盟大会に優勝して呉れ。できる事なのだ。頼む！(武田記)

蹴 球

蹴球-Association football-諸君、これほど男性的なスポーツが外にありますか？否々、これこそ「非常時日本」を背負って起つべき若人に、血潮みなぎる洗刺たる若人に、最も適したスポーツなのだ。真の男性は、真の男性的なるスポーツこそ愛すべきだ、先ず、蹴球を愛せよ、蹴球である、理解せよ諸君、このスポーツを。空は飽くまでも高く、ひろびろとした緑の大地を、心行くまで走り回り、跳ね回る、このスポーツを愛せざる者は現代の真の男性ではないのだ、男性的なる男性は、真の男性的なるスポーツを理解すべきだ。

昭和十五年度

昭和一六年一月発行

委員 佐藤 康次郎

山口 友三郎

山は日に日に緑を増し、野には種々の草花が思ふ俛に咲き乱れ、風は日を追って温かみを増す頃、荒れ果てたグラウンドに立つてより炎天下の下に不断の練習を続けたるも今は過去

と言ふ二つの文字に納めねばならなくなった。

さらば過去一ヶ年に垂んとする蹴球部を回顧して今年度の足跡を辿らう。そこには喜悅と哀愁とが二重奏となりて、色も濃く流れて居るのが見られる。

春の恵みが静かに訪れ、勇躍一番出で、新生活を続けんものと意気込むは独り禽獣草木に止まらず、若い吾等の蹴球部員も今年こそはと黄金時代の建設を目指して意気込み、先ず春の活躍のスタートを切ったのである。

左にその戦跡を記してみよう。

五月十一日(土曜日)

この日今年度最初の試合を行ふ。山中対山高第一軍

山高 8 (3) 0 (5) 1 (1) 山中

五月十四日(火曜日)

山高との試合は格が違つ為に実力の有無判然とし、同格の山工と三日目矢継早に試合を行ふ。

山中 1 (1) 0 (0) 0 山工

全国中等蹴球大会山形県予選村山地方大会出場記

八月三十一日我等全蹴球部員が待ちに待った大会である。次ぎ次ぎに送り出した先輩諸氏の誰もが頼む！」と言つて去つたその大会なのだ。そして我等はこの大会に勝つた。勝つたのだ。我々は我が蹴球部創立以来初めての優勝の二字を我が部に収め得て栄えある部史に更に新しき一頁を加へたのである。

八月一日東京日日新聞に掲載された通りに書いて見よう。

山工、師範両軍を破り

山中に輝く栄冠

中等蹴球村山大会

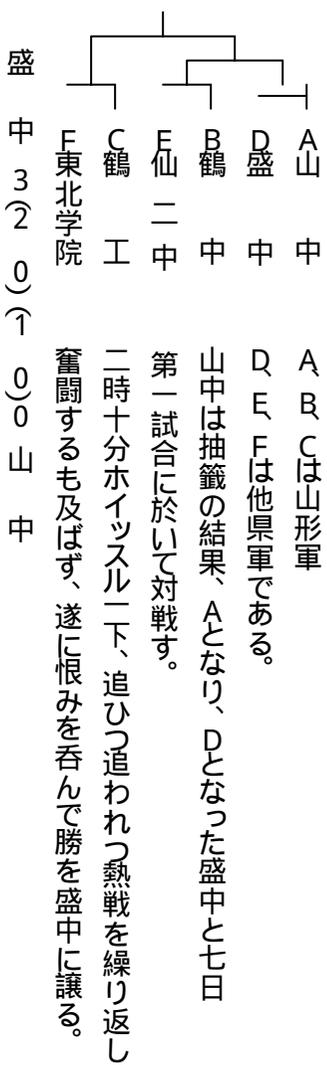
本社並びに県体育協会主催の村山地方蹴球大会は三十一日午前八時より快晴に恵まれて、山形中学球場で開催された。参加チームの山形師範、同中学、同工業と役員一同球場の中央に整列皇居遙拝して君が代奉唱裡に国旗を掲揚、銃後若人の意気と熱をもつて体位向上を目ざし正々堂々戦つ旨の宣誓あつて試合を開始、チームの組合せは抽籤の結果山形師範不戦一勝の幸運に恵まれ、及川、吉田、笹本、小山の四審判員の下に先ず中学対工業の一回戦から火蓋を切つたが、後半において中学はパスとポジションに妙味を發揮して10勝ち抜き、午後零時半から山形師範と決勝戦を展開、工業を破つた好調を持ちつゞけて意外に元氣良く、3-1のスコアで師範を破り同中学蹴球部創設以来の好成績で村山地方代表の栄冠を獲得し八月七、八、九の三日間、山形中学で開催の東北大会への出場権を得た。

全国中等蹴球大会東北予選出場記

八月七日 我々が四月以来此の日のために練習を続けて来た。その実力を發揮する日が到頭来たのである。我々の歡び嬉しさ、どんなであつたらうか。去年は村山予選に敗れ

て、この大会への出場権を失った。今年我々は見事に雪辱して晴の今日を迎へたのである。四月以来の練習にかへ、加へて八月二十四日から一週間の合宿練習(合宿練習の記は略す)で技量は完全と云へないながらも足りない所は意気と熱で補はうと元氣一杯この大会に出場したのである。

出場校及び組合せを左に記す。



あゝ遂に夢見た甲子園原頭に駒を進める日を失つたのだ。後輩の諸君必ず今の恨みを忘れないで呉れ。

明治神宮体育大会蹴球出場権争覇戦

九月十五日(日)此の日村山地方代表、庄内地方代表の山形県第一位決定戦を行ふ。東北大会に敗れた我々は唯残る此の一戦に望みをかけて居た。然るに天は我等に恵まず遂に敗戦に終る。

鶴 中 4(1)0(3)0(0)0 山 中
去るに臨みて

今去るに臨みて静かに思ふ時、過去の一年間は走馬灯の如く楽しかった合宿、そして幾度か涙に咽んだ練習、吾等の戦場だったグラウンドに、去りゆく我々にとってなんと淋しい感じを起させることよ。我々は春まだ浅き頃、甲子園目指して本校グラウンドに、或いは山高グラウンドに小人数ながらも一致団結してやった。だが然し戦運我等に利あらずして東北大会に敗れ、又神宮予選に敗れた。然も小敵とみくびつた盛中に年来の敵鶴中に去りゆく吾等にとつて、これ以上のくやしい事はあらうか。山中に入学して蹴球部に入った時その時より先輩諸氏並びに年毎に去りゆく上級生諸君に頼まれたその責任を果たし得なかつたのだ。さらば居残る諸君よ、主将を中心として一致団結して、元気で練習して呉れ！さうして目指す甲子園に進んでくれ頼む！

山形東高等学校 自治会雑誌

昭和二十八年(一九五三年)

昭和二十九年一月発行

サッカー同好会

我々同好会は今年六月に、会員六名によって発足された。終戦以来多くの部が復活したにも拘わらずサッカーは復活せずようやく同好会として実を結んだのである。これに当っ

ての我々の悩みは、会員の不足であった。それで、佐藤、原先輩の協力を得て二学期の始めには十五名になり、ようやく試合の定員になった。しかし練習方法も用語も知らずにただむむしやらに、グラウンドのバックネット目がけて休み時間や放課後練習らしきものをやってきた。九月には先輩、学校側の協力を得て県総合体育大会に出場出来る様になり、放課後六時頃迄へとへとなる迄練習をやり、雨天の際は教室でルールブックを引っ張り出して参考にした。そして愈々九月四日に、発足以来最初の試合、神は我等を見捨てしが第一回戦に名門鶴岡南校と対戦し十対〇で我等の努力も及ばず大敗した。この試合では、練習とランニングの不足が骨身にこたえた。彼等のパスワークは唯「美事」の二語につきた。その後毎日グラウンドでは野球部と共に練習に励み時々、山大のグラウンドを使用して迄もよくやり、十月の市内リーグ戦では対南高戦に善戦し、工高戦では全員ファイトなく、二敗して最下位に甘んじたが、全員に目にもみるものがあつた。そして同じく十七日には、初の遠征試合に臨み全員張り切つて、対米工戦では以前の試合では勝てそうもなかったがこの戦いで勝つと云う自信がついたにも拘わらず、得点出来ず二対〇で惜敗した。実に残念であつた。我等の試合経験と、まだまだ不足な練習が痛切に感じられたが、我々は先輩と共に練習に励み、十一月三、四日の市内リーグ戦に備えたが、三十日からの中間考査の為練習出来ず、全然練習なしに出場しその結果二敗したが、市内三位の賞状を貰つた。最初の賞状はこれなのだ。

以上の我々のかんばしくない試合結果なつて来ているが、今年度の試合も終了した最近には僅かに八名の二年生によつて来年部にして貰う望みをかけて練習しその傍ら、入会者の勧誘に悩んでいる。サッカーと云うものは男性的スポーツではラクビーと同様英国では国技になつてゐる程で、我国では柄が無さそうだがその反対である。世の多くの人々はサッカーは疲れて嫌いだという者も居るが、試合中の自分の位置に於いて活動すれば良いのである。本当のサッカーの味といふものは、練習と試合開始の瞬間と得点した時であつてその時の気持ちは何ともいえないものである。我々同好会員は唯会員不足、特に一年生の入会を願ひ、さらには来年に部にして貰う事を望んで、今後のサッカー同好会の発展を望んでやまない。諸君の入会を望む。

尚本年度のメンバーは次の通り

- (2) LR 伊藤 明 男(二年)
- (3) FL 佐藤 至 紀(二年)
- (4) HR 向 田 肇 兌(二年)
- (5) HC 佐 藤 利 雄(二年)
- (6) HL 山 川 道 雄(二年)
- (7) RW 庄 司 賢 一(二年)
- (8) RI 阿 部 匡 弘(二年)
- (9) CF 西 村 英 夫(二年)
- (10) LI 大 串 喜 久 雄(二年)

(1) LW片桐秀夫(二年)

昭和二十九年年度 創立七十周年記念 昭和二十九年十二月発行

蹴球部

昨年六月、会員六名に依って発足された我が同好会も一月六日、蹴球部として承認され愈々我が蹴球部の端が始まった輝かしい年といえよう。高橋主将以下六名の三年生が卒業し、部員九名の人数ではあったが、若人の意気にもえて、冬季練習に励み、今年一年大いにグラウンドを駆けめぐると心に誓った。次に本年度の戦績を記す。

村山地区春季サッカーリーグ戦(於本校)

第一回戦 東高 二対〇 南高 四月二七日

第二回戦 東高 一対四 工高 四月二八日

本年度始めて準優勝となる。

県南大会(於南高) 五月十六日

第一回戦 東高 一対〇 米工高

昨年の宿敵をLW片桐のシュート決まって第一戦をものにす。終始一貫、圧倒的に押し合った試合であった。

準決勝 東高 二対一 南高

後半のラスト十分間に、全員ファイト、ものすごくLH山川の見事なシュートとペナルティキックの二点で決勝に進む。南高に二連勝す。

決勝 東高 〇対四 工高

一日「三試合」とはひどい疲れで、敢闘したが遂に優勝を逸してしまった。

春季サッカー県予戦兼東日本大会(於新庄)

第四試合 東高 〇対一 酒田東高 六月五日

初めての遠征に全員ファイト申し分なし。だがダメ押し戦で惜敗した。

東北大会兼国体予選(鶴岡市)

東高 〇対五 鶴岡工高 七月三 四日

第二回戦で優勝候補と会い、持前のファイトで全員敢闘したが惜しくもチャンス逃す事度々、残念ながら得点出来ず屈服する。敵ながらコンビのうまさはずばらしかった。

第三回村山地区総合体育大会(於南高)

第一回戦 東高 一対一 南高 九月十二日

前半好調なすべりをみせ、新人橋本のシュート決まり一点リード。然るに後半全員ファイトなく屈服し、対南高戦に二連勝を逸した。

第二回戦 東高 三対二 工高

三年生出場し、二点リードされたものの、後半俄然東高魂を發揮し、ペナルティー一本RW庄司のきれいなシュート、LW橋本のシュート決まり、初めて山工を破った事を記し筆を

置く。あゝ嬉し。だが全体を通じて基礎技術の不完全が目立ったことは遺憾であった。

村山地区三校リーグ秋季大会（於南高）

第一戦 東高 一対二 南高 九月二十九日

つくづく練習の不徹底、コンビのとれない事が判然。入りそうな所でシュートされ惜敗す。対南高戦に一勝二敗。

第二戦 東高 ○対一 工高

実力五分五分のところ、一日の長ある山工に前半一点をとられたのが最後までたたる。初めて第三位におちた。

全日本大会県予選（於南高） 十月九 十日

東高 ○対五 鶴岡工

二度まで会うとは？全員敢闘空しく屈服す。

今年度の戦績は以上のような結果で全体を通じ練習改善の要が感じられ、テクニクが問題だった。

今年は第一回サッカークラスマッチが行われサッカー発展の基礎となり、近々校内に愛好者が多数見える事は、我が部として喜んでいる。部員不足に悩んでいる次第で、是非諸君の入部を期待する。我々は来年に備え、基礎練習を研究し、東高第一回蹴球部として新しい伝統を築き上げるためにも努力して居る。最後に直接コチして下さった緒先輩の並々ならぬご指導と顧問の先生の御力に深く感謝し筆を置く。 片桐